

歌舞伎に

魅せられて

伝統芸能を紹介するイラストレーター



日本が誇る伝統演劇である歌舞伎。江戸時代に庶民の絶大な支持を受けて発展してきた。常にスターを生み出し、今もお輝きを放つ。昨年には、東京・銀座に新しい歌舞伎座がオープンし、多くのファンが連日詰めかけている。歌舞伎に魅せられた兵庫県西宮市出身でイラストレーターの辻和子さん(52)が、新聞連載や著書などでそのすばらしさを伝えている。都内の仕事場にお邪魔した。

(神戸新聞社東京支社編集部長 小野 秀明)



上:作品の前に立つ辻和子さん(辻さん提供)
下:仕事場でイラストを描く辻さん

江戸時代に完成

歌舞伎の語源は「傾く」からと言われている。奇抜な身なりや行動をする「かぶき者」が、戦国から江戸時代初めにかけて登場したことも関係している、物の本には書かれている。

歌舞伎といえば、役者はすべて男性というのが常識だが、元祖は出雲の阿国という女性とされている。阿国は出雲大社の巫女だったが、率いる一座の「かぶき踊り」が人気を博し、広まったという。

女性が始めたのに、男性だけが登場するようになったのは、江戸時代初期の三代將軍家光が、風紀が乱れるとして、女性による興業を禁止したためだという。これによって、男性が女性を演じる「女形・女方」という独自の演劇スタイルが誕生した。

「仮名手本忠臣蔵」や「東海道四谷怪談」など有名な作品が作られ、市川團十郎らのスターも続々と出て、歌舞伎は江戸時代に完成された。ちなみに歌舞伎の言葉は、平成の現在でも私たちの回りで生きている。例えば「二枚目」や



「白波五人男」のワンシーン。分かりやすくするため、現代の戦隊ヒーローものと比べている

「三枚目」。劇場の看板に描かれた役者の名前の順番が、二枚目にはラブシーンを演じる男前、三枚目は道化役と決まっていたことから来ているのだ。

父親に連れられて

辻さんの名刺には「歌舞伎にすと」との肩書がある。現在は、東京新聞の金曜朝刊で「かぶき時記」の連載を持ち、名古屋で発行されているフリーペーパー「MEG (メグ)」で歌舞伎を紹介している。

「歌舞伎がよく分からない、という人が多いので、初心者の方向けに書いています」

歌舞伎のワンシーンやポイントをカラーイラストと分かりやすい文章で表現し、伝統の世界に誘ってくれる。



隈取りの数々を紹介

歌舞伎との出会いは、小学生のころ。歌舞伎好きの父辻國臣氏に連れられて見に行ったのが始まりだった。國臣さんは、歌舞伎や音楽が好きで、地元の歌舞伎愛好会にも入っているほどだった。当初はおもし



ニューズウィーク日本版の歌舞伎特集に掲載された作品。歌舞伎の見方をワンポイントで

ろいと思えず、弁当の時間以外は寝ていて、しかられたこともあったという。しかし、観劇を重ねるうちに段々とのめり込み、成人後はすっかりとりことなった。長唄の演奏家だった叔父から聞いた昔の名優の話などを國臣さんが教えてくれたという。辻さんの絵画の才能は祖父母から継いだものなのかもしれない。祖父は日本画家の荒尾昌朔さん。祖母が洋画家の武子さん。子どものころから、



講演会で歌舞伎について解説する辻さん(2014年1月、辻さん提供)

祖母の絵画教室に「入りびたつて絵を描いていた」という。

西宮市の甲陽園と甲東園に住み、近所の関西学院大の前でよくセミを取って遊んでいた少女は、市立上ヶ原小学校、市立瓦木中学校、兵庫県立西宮北高校へ進学。中、高

では美術部に所属し、好きな絵に打ち込んだ。京都の嵯峨美術短大(現・京都嵯峨芸術大学短期大学部)に進学し、ビジュアルデザインを学んだ。卒業後はフリーのイラストレーターとして活動。大阪の事務所に誘われ、駅弁のパッケージや就職雑誌のカットなどをデザインした。2年後にイラストレーターの仲間に誘われて、事務所を間借り。ちょうどバブル経済の時代。大手百貨店の顧客向け冊子の表紙や企業の社内報など次々と仕事が舞い込んだという。

趣味が仕事に

東京に移ったのは26歳だった。時々、東京の出版社やデザイン事務所に作品を売り込みに行っていたが、やはり仕事は東京が圧倒的に多く、思い



鉛筆による下絵。瞬間に男女の姿が浮かび上がる

切って上京した。お菓子のパッケージやカレンダー、社内報など仕事は何でもこなした。大手百貨店のフランスフェアでは、一編成の電車の広告がすべて辻さんの作品となったことも。

趣味だった歌舞伎と仕事が結びついたのは、ひよんなことからだった。

友人と一緒に歌舞伎を見に行く際に、辻さんは見どころなどを書いたイラスト入りの小冊子を作っていた。

ある編集者を誘った時、その小冊子を配ると、奥さんが「本を出したら」と言った。辻さんは「そうかも」と、早速企画書を作って出版社へ。

歌舞伎の登場人物が恋話をするという斬新な内容が採用され、2006年に「恋するKABUKI」として出版された。

そして、本の書評を書いてほしいと、東京新聞に行ったことが、連載を始めることにつながった。

温かみのあるイラストと 軽妙な文章

辻さんは自宅の一室を仕事場に充て、平日の日中に仕事をする。

下絵は鉛筆で、パンフレットの舞台写真などを見ながら描いていく。見ていると、まさにさらさらという感じで、たちまち役者の姿が浮かび上がってくる。形を整えるために計3回描き直し、筆で色をつける。絵の具は日本画用のものを使って深みを持たせている。簡単な説明も手書きで添えられ、親しみやすく温かみを感じられる。

辻さんの特長は、絵だけではなく軽妙な文章にもある。

①「ある田舎の美少女が地方都市に飛び出し、大企業のOLに就職しましたが、社内恋愛で駆け落ちして人妻となったかと思えば、夫を助けるため自らの意思で、ホステス業に転向」

②「ノリノリの音楽劇。テンションは最初から高く、バックミュージックは練りに練られ、主役は踊って暴れて大活躍。テーマは『ザ・正面突破』。血湧き肉躍る1時間です」

昨年出版した「魅力満載!一番わかりやすい歌舞伎イラスト読本」から抜粋したものが、何の演目か分かるだろうか?

答えは、①が赤穂義士を題材にした「仮名手本忠臣蔵」。②は源義経と弁慶の一行が関所を通過する場面を描いた「勸進帳」だ。

歌舞伎を全く見たことがない若い人にも想像できるよう、工夫を凝らす。大胆な発想とユーモアあふれる文章を、イラストと合わせて読めば、あ

なとも歌舞伎を見たくなるのでは。

支えてくれた父

歌舞伎には独自のスタイルがある。例えば「見得」と呼ばれる独特のポーズ。着物の文様、髪型、化粧の一種の隈取りなどもそうだ。辻さんは、細かなところにまで気を配って正確に描き分け、分かりやすく説明する。

それを支えているのが、亡き父の國臣さんが残してくれた膨大な資料だ。本棚いっぱい全集など歌舞伎に関する本や資料が並ぶ。こうした資料で調べたことを、作品に反映させている。

辻さんにお父さんのことを伺った。まじめで誠実、そしてユーモアのある人。歌舞伎の持つ一種ぶっ飛んだ感覚や闇の部分に理解が深かったという。リベラルではあるが保守的な一面も。辻さんがフリーのイラストレーターを目指したときは反対され、けんかになったという。



父親の國臣さんが集めた図書や資料。辻さんの作品作りを支える

歌舞伎に魅せられて数十年。歌舞伎への門を開けてくれたお父さんに伝えたいことを尋ねると、「今の私があるのは父のおかげ、ありがとう」と感謝の言葉が返ってきた。そして、新しい歌舞伎座や十二代目市川團十郎、十八代目中村勘三郎ら相次ぐ名優の死去、次世代の台頭など、新たな時代に向かう歌舞伎の現状について報告し、意見を聞いてみたいという。

愛好した歌舞伎が娘につながり、さらに広げられる。父親にとって、これほど嬉しいことはないだろう。

きれいでダークな世界

最後に、辻さんに歌舞伎の魅力を尋ねた。「きれいや楽しいだけではない。闇の部分、ダークな世界、カオスがおもしろい」「あり得ない状況が繰り広げられるが、うまい役者が全身全霊でやると納得させられる」「こらえきれない人間の感情と納得できないが、こうなるしか道がなかった。ぎりぎりの選択を強いられることに感動がある」「歌舞伎の言葉が難しいといわれるが、同じ日本語。洋楽は歌詞が分からなくても伝わっている」「同じ芝居でも役者が違うと違ったものになる。クラシックやジャズと同じ」

機関銃のように言葉が飛び出した。本当に歌舞伎が好きなんだ。さすがは「歌舞伎にすと」だと納得した。

【辻和子さんの仕事】

著書は、「ヒマラヤ旅の玉手箱」(双葉社)▽「恋するKABUKI」(実業之日本社)▽「歌舞伎にすと入門 知る観るKABUKI 100のツボ」(東京新聞)▽「魅力満載!一番わかりやすい歌舞伎イラスト読本」(実業之日本社)

「歌舞伎新時代」を特集した2013年5月発売のニュースウィーク日本版で、「知っておくべき10のお約束」と題して初心者向けのページを担当した。このほか講演で歌舞伎のすばらしさを伝える仕事もしている。

歌舞伎関連以外では、通信販売の雑誌の表紙や大手ガス会社のカレンダー、広告のイラストなど、全国各地で開催されるシャンソンの祭典「パリ祭」のポスターと舞台美術を担当した。NHKラジオのスペイン語講座の表紙も手掛けた。

10月3日から10日には、大阪で個展を開催する。テ-

マは「FESTA」。大阪市中央区大手通1-1-10 ギャラリー「CENTENNIAL」(☎06・6943・4060)で、オリジナル作品を展示する。



今年のシャンソンの祭典「パリ祭」のポスター

アルファベットをモチーフにした作品。大阪の個展でも展示される予定

